新潟大学国際センター紀要　第３号　131 - 138，2007年　Journal of the International exchange Support Center
2007, Vol. 3: 131 - 138, Niigata University

ロシアにおける中・上級の日本語話しことば教育

A Study of the Spoken Japanese Education of Intermediate and Advanced Levels in Russia

クルガンスカヤ・ユリア*
（kuyulia5@yahoo.co.jp）

The aim of this paper is to review the situation of the spoken Japanese Education of intermediate and advanced levels in Russia and to offer some ways for improvement of it.

１．はじめに

国際交流基金（2003）「海外日本語教育機関調査」の結果によると、ロシアの教育機関における日本語学習者数は約8,201人に上ぼり、機関数は初・中等教育41、高等教育72機関、学習者数は初・中等教育3,028名、高等教育5,173名となっている。

だが、最近は、北極圏に近いムルマンスクなど、日本との接点が従来ほとんどなかった地域においても、日本文化への興味などから日本語教育が始まっている。また、2005年は、機関数は初・中等教育55、高等教育82、学校教育以外14機関、学習者数は初・中等教育3,662名、高等教育5,683名、学校教育以外1,411名となり、2003年『海外日本語教育機関調査』の時より増加している。

このような状況の中で、学習者数が増加するにつれて、ロシアにおける日本語教育上の問題点が増加している。特に中・上級の日本語話しことば教育には、解決すべき課題が沢山あると言える。中・上級の日本語話しことば教育に、適当な教材の不足、教材・教授法に関する情報の不足、日本語母語話者日本語教師の不足などという要因が大きい影響を与えている。本稿では、中・上級言語能力と話しことばとは何か、ということを定義し、現在ロシアにおける中・上級日本語教育の状況と日本語話しことば教育の問題点を概観し、日本語非母語話者日本語教師（＝ロシア人）の力で問題点を解決できる方法について提案を行う。

２.「話しことば」と「中・上級言語能力」について

中・上級話しことば教育という問題を考えるにあたって、まず、「話しことば」とは何か、「中・上級言語能力」とは何か、ということについて定義をおこなう。

２－1. 話しことばの特徴

* 国際センター研究生（極東国立人文大学教師）

日本語教育の現場でしばしば混乱が見られるのは「口語」の定義づけである。「口語」とは、言語学等におけるspoken languageのことで、話しことば（書き言葉の対語）である。（Wikipedia）。「口語」は、音声言語の意味に用いられると同時に、明治以降の「現代日本語」の意味でも用いられることが多いが、学習者は＜口語＝spoken language＝会話＞とのみ理解していることが多く、現代一般の書物や新聞や手紙なども「現代日本語」の「書き言葉」の「口語体」であることの認識に欠けている場合がある。

日本語教育では、「聞く・話す」ことの指導を「話しことば」の指導、「読む・書く」ことの指導を「書き言葉」の指導と呼ぶことがあるが、これは言語体系の面を重視した考え方である。

話しことばは、書き言葉に比べれば、文の構造においても文を構成する語彙においても単純なものである。ハッチ（Hatch、1992）は話しことばと書き言葉を分ける基準として（１）計画性（planning）、（２）文脈サポート性（contextualization）、（３）形式性（formality）をあげている。計画性で言うと、話しことばは、計画性に乏しい。逆に、文脈のサポート性で言うと、豊富である。形式性で言えば、参加者同士の社会的な地位や距離などが作用することは多少はあっても、一般的には、日常会話場面は約束ごとが少なく形式性は低い。他方、書き言葉は、この逆、計画的であり文脈のサポートが乏しく、形式性が高い。

バイゲイト（Bygate 1998 p. 21）は、ハッチの三つの基準を取り上げ、話しことばの特徴を次のように７点にわたって整理している。

⑴　発話は完結された文では構成されていない。代わりに、句や節で構成されている。
⑵　双方で共有されている旧情報を最初に持ってきて、それに新情報を提供する形式で発話がなされる。
⑶　相手との間に距離が置かず、個人的に関わりを持っていることを強調する。
⑷　語彙や文体などに公的性格があまりない。
⑸　文法によってではなく、隣り合って言われることによって命題間の関連性を示す。
⑹　修正や繰り返しを多用する。
⑺　フィラー、ポーズ、イントネーションがある。

話しことばと書き言葉のもっと大きな差異は、伝え手と受け手が伝達の＜場面＞をどのように共有しているか、それが表現にどのように反映されているか、ということである。話しことばでは、普通、話し手と聞き手が一定の＜場面＞を共有し、それに存在しているので、身振りや表情や眼前の事物はもちろん、実際の声の調子・イントネーション・プロミネンス等が表現や理解に大きな影響を与えている。

本稿では、つぎのように話しことばを定義する。話しことば（＝口語＝spoken language）とは、普通の日常生活の中での会話で用いられる言葉遣いのことである。ここでいう「話しことば」とは、いわゆる「旅行英会話」などというときの会話にかぎらず、もっと広いものである。むしろ、現在の社会生活をいとなむために、情報や意志の伝達の手段として、音声を通じて用いられることばを総括して、「話しことば」と考える。日常の挨拶から職場における仕事上のやりとり、教室での講義、研究成果の発表、ラジオ・テレビなどによる情報の獲

得まで、広く実生活に用いられるものを含む。

２－2. 中・上級言語能力

日本語教育では、どこで初級が終わり、どこから中級が始まり、あるいは、上級が始まるのかという境が、実はあまりはっきりしていないように思われる。中・上級とは、初級を終了してから日本人と同等のレベルに到達するまでの段階を指す。「日本人と同等のレベル」という表現があいまいであるように、上級の意味もあいまいであるし、中級と上級の境界線も明瞭ではない。分け方の一つの目安として『日本語能力試験』の級別認定基準がある。中級と上級については概ね、２級が中級、１級が上級と考えられる。だが、文法、語彙、漢字を中心にしている「日本語能力試験」は学習者の発話能力を測定できない。

最近、外国語学習者の発話能力を測定するために、OPIというテストを使うことがある。OPIとは、ACTFL（American Council on the Teaching of Foreign Languages : 全米外国語教育協会）によって開発された、テスターと被験者が１対で行う、最長30分の会話能力テストのことである。OはOral（口頭）、PはProficiency（外国語熟達度）、IはInterview（面接）、つまり、面接方式による外国語熟達度測定である。このテストにはコミュニケーション能力のような言語能力観に基づき、また、汎言語的に通用するとされる外国語能力規定（ガイドライン）があり、それを基に被験者の能力（（熟達度）判定を行う。このガイドラインは、「初級」、「中級」、「上級」、「超級」という４段階のみではなく、それぞれの中でサブレベルごとの、つまり、「初級－下」、「初級－中」、「初級－上」、「中級－下」、「中級－中」、「中級－上」、「上級－下」、「上級－中」、「上級－上」「超級」（「超級」にサブレベルはない）という10段階の詳しい能力記述が示されている。

OPIのガイドラインによると、ACTFL言語運用能力基準の中級と上級の概略は以下の表のようなものである。

表１.

	総合的タスク/機能	場面・話題	テキストの形
上級	詳しい説明･叙述ができる。予期していなかった複雑な状況に対応できる。	インフォーマルな状況で具体的な話題がこなせる。フォーマルな状況で話せることもある。	段落
中級	意味のある陳述･質問内容を、模倣ではなく創造できる。サバイバルのタスクを遂行できるが、会話の主導権を取ることはできない。	日常的な場面で身近な日常的な話題が話せる。	文

表２.

	文法	語彙	発音
上級	談話文法を使って統括された段落が作れる。	漢語系の抽象語彙の部分的コントロールができる。	外国人の日本語になれていない人にもわかるが、母語の影響が残っている。
中級	高頻度構文がかなりコントロールされている。	具体的で身近な基礎語彙が使える。	外国人の日本語に慣れていない人にわかる。

表３.

	社会言語学的能力	語用論的能力	流暢さ
上級	主なスピーチレベルが使える。敬語は部分的コントロールだけ。	相づち、言い換えができる。	時々つかえることはあるが、１人でどんどん話せる。
中級	常体か敬体のどちらかが駆使できる。	相づち、言い換えなどに成功するのはまれ。	つかえることが多いし、１人で話し続けることは難しい。

現在、OPI以外、外国語学習者の発話能力を測定できるテスト、また、言語運用能力基準がはっきり記述されているテストがほとんどないと言える。よって、ここでは外国語学習者の言語能力を測定するためにOPIの手法を使うことにする。

中・上級の外国語学習には、学習者は自分が実際にどんな程度に日本語が運用できるか、日本語学習にどんな留意点があるかということを知り、もっと効率的に学習ができると思われる。また、日本語教師にとって、OPIは話しことば向け授業をもっと効率的にすると考えられる。

３．ロシアの学習者の日本語レベルと学習目的

日本語を学習する目的は、地域によって、あるいは教育段階などによって異なる。日本語教育の主流は高等教育機関で、学習の動機は日本文化（伝統文化、武道、文学、映画、アニメ、ポップカルチャー、テクノロジーなど）への興味や、将来のビジネスに役立てるためといった実利的な目的などがある。だが、日本語を使ってコミュニケーションしたいという欲求がどの教育段階でも主要な学習目的になっている。

初等・中等教育に関しては、日本語教育の位置づけは多くの場合、音楽、美術等と同様の

選択科目である。日本が隣国であり、また、アニメなどマスメディアを通じて日本文化、経済発展等が知られているため、子供自身の希望で日本語学習をする場合もあるが、異文化教育を目的として両親の希望により、日本語を選択する場合もある。

ロシアには義務教育課程で、特定の専門分野に重点を置いた教育機関や、ヨーロッパ諸語をはじめとする特定の外国語に力を入れた学校が存在するが、日本語についても同様で、日本語教育の特別のカリキュラムを有する専門初・中等教育機関がいくつか存在している。そのような学校では、高学年（日本の高校課程）の時点で日本語能力試験３級程度の日本語能力を有する学生が見受けられる。

高等教育に関しては、日本語学習の動機は、研究目的もしくは純粋な日本文化等への興味が主である場合と、実務目的の２類に大きく分けることができる。卒業後は日本への留学もしくは日本語を生かせる就職を希望する学生が多いが、日本関連企業や日本語教育機関への採用数が限られているため、希望に沿う職類に就くことのできる学生は多くはない。

ロシアの高等教育機関における日本語学習者は、おおむね高い日本語運用能力を有するものの、一部の機関では学習意欲を持つ者とそうでない者の間で極端な実力の差が見られる。卒業時、日本語を専門にしている学習者の平均的な日本語レベルは日本語能力試験２級程度である。だが、色々な要因で、日本語を専門にしている学習者の日本語言語能力は高くなく、平均的にOPIの中級レベルに相当していると言えるだろう。

４．ロシアにおける日本語中・上級話しことば教育に影響を与えている要因

国際交流基金が2003年度に実施した「海外日本語教育機関調査」の結果によると、海外における日本語教育上の問題点として多くの機関からあげられたのは、適切な教材の不足、教材・教授法に関する情報の不足というリソースの問題と、施設・設備が不十分という施設（ハード）の問題である。また、日本文化情報の不足、高等教育機関では、教師数の不足と教師の待遇不十分が多くの機関で問題であると考えられている。ロシアの教育機関も例外ではないと言える。

日本語中・上級話しことば教育に関しては、日本で作られた教科書が使用されることが多い。最近は、ロシア人教師の著作による日本語教科書も出版されるようになっているが、中・上級話しことば教育に向けの教科書が少ない。それで、依然として日本で作られた教材への需要は高い。現在、主に使用されている教科書は「みんなの日本語」、「新日本語基礎」、「新文化中級日本語」、「文化中級日本語」である。だが、教室と外のギャップでまず学習者が第一に気づくのは教室外の言葉と教室内で使用する日本語との違いであり、現実に使われている教室外の日本語が聞き取れなかったり、理解できなかったりするという問題であろう。つまり、教室内の日本語、特に教科書や練習用テープに入っている日本語は書かれた日本語をそのまま話しことばにしたものであることが多いからである。

教材と日本人教師だけを通して日本語中・上級話しことばと接触しているロシア人学習者が多い。正規の教育課程において教鞭をとる日本人日本語教師の多くは、政府機関や民間国

際交流団体などのプログラムにより派遣されるケースである。2005年には、独立行政法人国際交流基金からの派遣教師と国際交流基金以外からの派遣教師の数が23名であった。現在、日本語教師の多くは、ロシア人教師であり、700名以上となっている。大学の日本語専門課程の卒業生がそのまま大学に残って日本語教師となる例も多く見られる。ロシアの学習者には、日本語母語話者と話す機会が多くないと言える。もちろん、ロシアの極東地方のほうが日本人と話す機会が多いが、日本語母語話者が一人もいない地域もある。

日本語中・上級話しことば教育上の問題点のもう一つは、教材・教授法に関する情報の不足である。日本語教育専門課程の大学生は、外国語教育を勉強しているが、外国語教育の理論はヨーロッパ語教育理論であり、日本語教育の特徴、また、日本語の特徴に注意を向けていないと考える。ロシア人日本語教師は、試行錯誤を繰り返しながら、中・上級話しことばを教えていることが多い。多くの場合では、中・上級話しことば教育に向けの教材があっても、教材・教授法に関する情報の不足のせいで、話しことば教育はうまくいっていないと現状である。

5．提案

以上のことをふまえて筆者は、ロシアにおける中・上級の日本語話しことば教育の改善のために、以下の４点について提言を行う。

１）学習目的の明確化

以上に述べた通りに、多様の学習目的の中で、日本語を使ってコミュニケーションしたいという欲求が主要な学習目的になっている。本来ことば、特に話しことばを学ぶ目的は、その言語によってコミュニケーションを行うことであるから、どの段階の学習者でも、程度こそ違え、その言語を通じてコミュニケーションを行うことが重要な目的の一つである。
中・上級では、教材においても、教授法においても、学習目的別という側面が、初級の場合以上にははっきりと現れてくる。

初級日本語教育の場合は、ゼロレベルから出発して、教えなければならないことのうち、何を教え何を捨てるかという選択が問題になるが、中・上級の場合は、逆にまず到達目標を上限に設定し、初級の終わった段階を下限として、いわば上から下へ線をひき、その線に添って教育内容を決定することになる。この際、最終の到達目標は学習者のニーズにもとづいて決定される。日本研究をめざす者ならその研究を可能にする能力が、外交・実業など実務にたずさわる者なら、その実務を能率的に行い得る能力が、その最終目的となる。

２）教材を選ぶ際留意点

現在、中・上級での会話学習の教科書は、少ない。また、成人に対する日本語教育のテキストなどで採用されている表現形式は、多くの場合、書き言葉的な傾向が見られる。もう一つの問題は語彙の問題である。書き言葉で多く用いられる語彙はすべて話しことばとして使

うと不自然であるかのような誤解を学習者は持ちやすい。それで、適当な教科書を選択するには、注意を要する。

また、教科書だけに頼ってはいけないということはよく言われていることである。教科書以外、中･上級のレベルで日本語話しことばの習得を促進できる様々な教材がある。例えば、音声テープ、ビデオテープ、インターネット、スライド、絵、写真、模型、実物などが使われる。学習者のために作られた語学教材ではなく、日本人のための情報提供手段である新聞、雑誌、小説、テレビ放送の録画などの生教材も、言語学習を社会と結びつける手段として歓迎されている。また、コンピュータを利用したCAI教材もいろいろと開発されている。

学習者は中・上級のクラスに入るまでにすでに風俗・習慣などといった日本文化・社会の表面なものに対する興味は少なくなり、その奥にある今日の日本的なもの・今日の日本人的なもの、そしてそういったものに対する解説を求めようとしていると思う。そのように考えると、そうした興味に応じるような、今の日本人の価値観などが顕在化した国際、経済、社会、教育、家庭などの分野における話題を扱ったものが、このレベルの教材としてふさわしいと言える。

3）中・上級の日本語話しことば教育に向けた教室活動

日本語話しことば教育には、初級のレベルでロールプレイを使うことが多い。だが、初級で使うロールプレイは、日本語の知識が足りないので、学習者が自由に話す個所を少なくしたり内容が単純であったりするような、コントロールされたものである。日本語、また日本社会、社会関係の知識が広くなってきた中・上級では、ロールプレイの数を増やしたり、内容を複雑したりして、自由度を高くした活動にする。

ロールプレイの他にも様々な活動がある。中・上級で日本語話しことばとコミュニケーション能力を身につけるためにふさわしい教室活動例を以下に挙げる。

● ディベート

ディベートというのは、「ある論題について否定側と肯定側にわかれ、一定のルールの下に議論をするゲーム」である。ディベートには、二つの意味がある。一つは、「議論する」ということで、もう一つは「議論技術の訓練」という意味である。

中･上級の日本語話しことば教育には、ディベートが、理論的な思考力やコミュニケーション能力を身につけていくための有効なトレーニングである。また、学習者にとって日本語力の向上にも非常に有効で、筆者も実際にディベートに参加した経験があるが、日本語会話の様々な練習法を試みる中で、ディベートが最も有効だと考えられる。

● ディスカッション

ディスカッションというのは、参加者が意見や情報の交換をしたり、問題を解決したりする協力型の議論の形態である。ディスカッションは、ディベートと異なり、ここでの発言は学習者の考えに基づくものである。ディスカッションは、日常生活でも会社の会議やサークルのミーティングなどで行われているので、日本語授業に日本語会話能力向上の手段として用いることが有効である。

● プロジェクトワーク

プロジェクトワークとは、現実社会で通用するコミュニケーション能力のために、言葉の形の正確さではなく、「意味のやりとりをなめらかに進める力」を養うための学習活動の一つである。「意味のやり取りを滑らかに進める力」とは、具体的には、4技能を総合的に使って相手とのやりとりを成功させる力や、何か障害があればそれを回避したり乗り越えたりする力を意味する。

プロジェクトワークとは、特に学習者が、学習者同士で話し合って計画を立て、教室の外でインタビュウや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果を持ちよって一つの製作品（報告書、発表、ビデオなど）にまとめる学習活動を指す。

中・上級の日本語授業には、活動を選ぶ時、伸ばしたい力や学習者のニーズを考慮する必要がある。また、話したいという気持ちや話す必要性を高めるためには、学習者が興味を持っているテーマにすることが大切である。

4）日本語教育関係のネットワークの活発化

日本語話者教師が多くない、中・上級の日本語話しことば教育に向け適当な教材が少ないなどという状況で、ロシア人日本語教師は日本語教育関係のネットワークをもっと活発化するべきだと思っている。現在、CIS日本語教師会がモスクワ、ノヴォシビルスク、ウラジオストクにある。面積が広いロシアにとって、それは非常に少ないと思う。他の地域では、地元の教育機関の日本語教師は在ロシア日本大使館と共催で日本語教育の会議を行っている。情報をシェアすることでロシアにおける日本語教育の問題点などを深く掘り下げて議論することができるだろう。このような議論こそがある教育の側面を活発にすると考える。

ロシアには、地元の教育機関の間だけではなく、隣の地域の機関の間の日本語教育関係のネットワーク、また、日本語を教えている全ロシアの教育機関の日本語教育関係のネットワークがあれば、日本語教育の体験、教授方、教材の交換ができるようになり、ロシアにおける中・上級の日本語教育のレベルが上がると考える。

参考文献

Bigate, M.（1998）Theoretical Perspectives on Speaking. Annual Review of Applied Linguistics.
Hatch, E.（1992）Discourse and Language Education. Cambridge University Press.
日本語教育学会（1982）『日本語教育事典』大修館書店
山内博之（2005）『OPIの考え方に基づいた日本語教授法』ひつじ書房
http://www.jpf.go.jp 国際交流基金